

第4章 復元の根拠資料

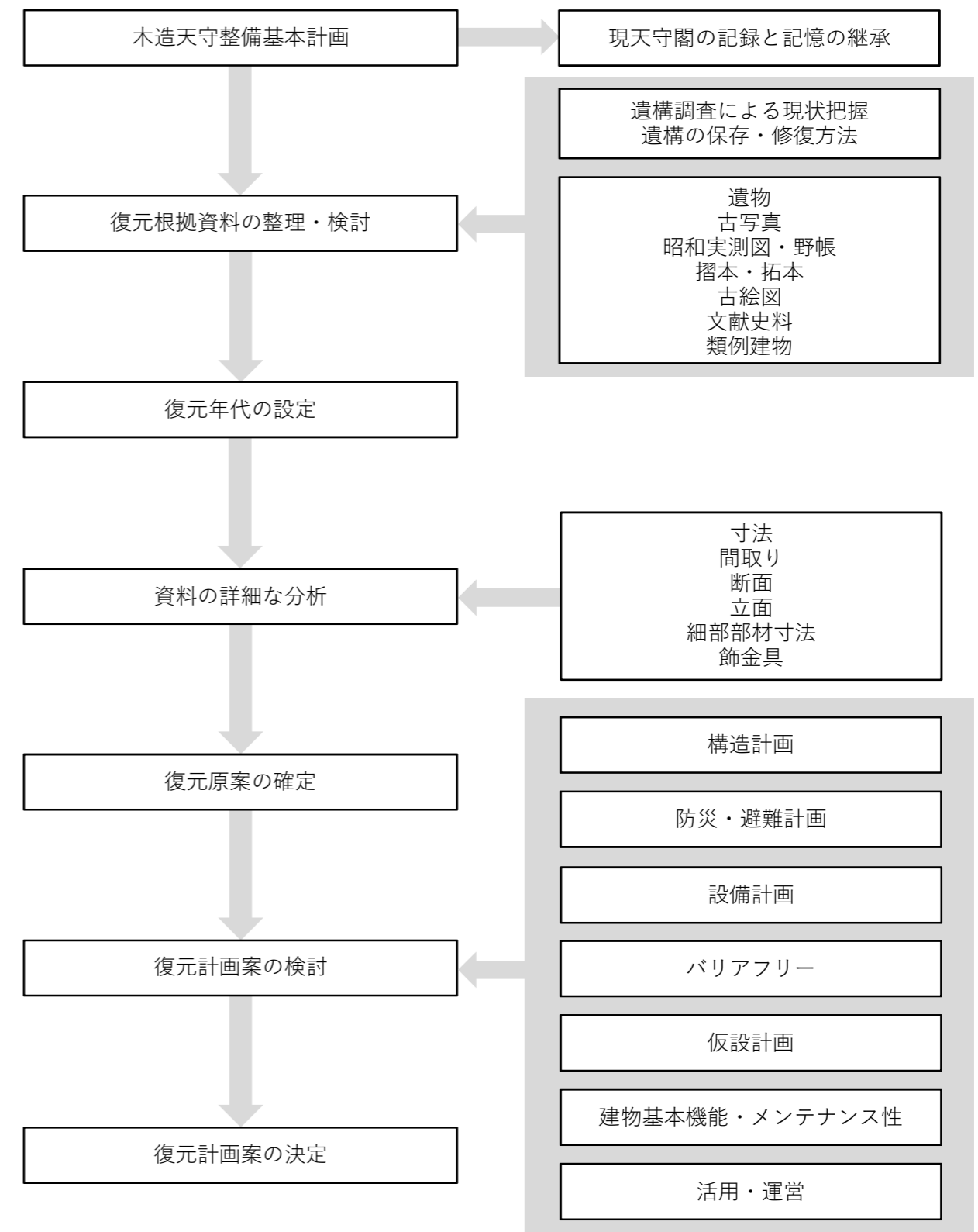
(1) 復元根拠資料の採用方針

名古屋城では、尾張徳川家から陸軍省、宮内省、名古屋市と管理者が変わっても、重要な遺構や多様な資料の保存・記録が継続的に行われており、築城時から各時代の改修・改変などの変遷を詳細にたどることができる。

名古屋城天守の復元根拠資料としては、天守台遺構の他、遺物、古写真、実測図・野帳、古絵図、文献等があり、以下の優先順位に基づいて、これらの豊富な資料から得られる事柄を相互に照合しながら分析、整理し真実性の高い復元原案を確定していく。

優先順位	根拠資料	特徴
①	遺構	復元建物の位置、高さ基準の蓋然性を示す。
②	遺物	金鯨鱗、飾金具、銅瓦、土瓦等の遺物により、その素材、仕様、文様、技法の根拠となる。
③	古写真	名古屋市国宝建造物対象撮影事業により撮影された焼失前の復元建物の姿が、鮮明なガラス乾板写真として遺されており復元建物形状、材種、納まり等の根拠となる。
④	昭和実測図及び野帳 摺本・拓本	建物規模に関わる柱間、階高等の主要寸法から各種部位・部材の詳細寸法まで、内外に渡り復元建物の寸法を決定する根拠となる。
⑤	古絵図	特に宝暦年代に行なわれた大修理について、多数の古絵図が遺されており、天守台積み替えの他、修理工事全体、修理前後の改変等について具体的かつ詳細に確認でき、古写真、実測図との比較により宝暦大修理から焼失前までに大きな改変が行われていないことの根拠となる。 解体、修理に際しての古絵図により、古写真、昭和実測図では記録できない金鯨の下地構成や仕様等、目視できない部分を確認することができる。
⑥	文献	築城時の工期、仕様を確認できる中井家文書、宝暦年間に行われた大修理全体の仕様書といえる「御天守御修復取掛かりより惣出来迄仕様之大法」、そして江戸から明治にかけて編纂された名古屋城の百科事典ともいえる『金城温古録』等の文献により、古写真による形状、昭和実測図による寸法に加え、仕上、仕様、技法を補足することができる。

【復元原案・復元計画案の検討プロセス】



・復元原案 : 史実に基づき宝暦大修理後の姿をまとめた案  
 ・復元計画案 : 現代的要素や施工条件等を加味した実際に建設する案

(2)遺構

[天守台]

①概要

本丸の北西隅に位置する天守台は石垣の他、内部の盛土、石樋及びたたき面がある（概要は2章(1)-②-A-アによる）。天守台石垣については大小天守それぞれについて外側の天守台石垣と内側の穴蔵石垣からなり、また大小天守を繋ぐ橋台も外側と内側からなる。

②歴史の変遷

築城時から現在までの天守台石垣の歴史の変遷は史実上の天守台石垣の修理履歴によると以下のようになる。

- ・江戸期 築城時 慶長15年（1610）～宝暦年間の大修理まで  
天守台石垣の普請は慶長15年（1610）6月より根石置きが始まり、同年8月には天守台が完成したとされている。
- ・江戸期 宝暦大修理 宝暦2年～宝暦5年（1752～1755）～幕末  
天守台石垣の孕み出しと沈下が著しくなったため、宝暦2年（1752）に石垣の一部解体、積み直しを伴う天守の大修理が行われた。この宝暦大修理は宝暦5年（1755）までの4年間に行われ、天守台石垣については、主に北面と西面の大部分で解体・積み直しが行われた。  
その後、幕末までの修理履歴で天守台石垣について記載のあるものは無い。
- ・明治期～昭和期（天守焼失前）  
明治24年（1891）の濃尾地震で、天守台石垣については大きな被害の記録はない。
- ・昭和期 戦災による天守焼失 昭和20年（1945）～積替工事前 昭和27年（1952）  
昭和20年（1945）5月14日の空襲により天守が焼失し、火災による被熱のため、石垣も損傷した。
- ・昭和期 石垣積み替え工事着手昭和27年（1952）～天守閣再建工事着手前 昭和32年（1957）  
被熱により支持力を失い、年と共に崩壊が進んでいた内側の穴蔵石垣をそのまま放置するとさらに崩壊が進み、外側の石垣も崩壊の恐れが出てきたため、昭和25年に内側の石垣積み替え工事の国庫補助金が申請され、昭和27年度から昭和30年度の間に数回に分けて工事が行われた。
- ・昭和期 天守閣再建(SRC造)工事 昭和32年（1957）～昭和34年（1959）  
再建する天守閣の基礎、ケーソンの沈設工事に伴い、天守台石垣は内外とも、一部積み直しが行われている。
- ・昭和～現在 天守閣再建後 昭和34年(1959)～令和4年（2022）現在  
天守台石垣の修理履歴はない。

以上より、築城後約150年たった宝暦年間の大修理で天守台は一部姿を変えているが、その際の積み直し工事の様子をまとめた文献や絵図が遺されており、麓和善・加藤由香がこれらを詳細に分析し「名古屋城大天守宝暦大修理における石垣工事について」の中で、具合的な工程、工法、内容を明らかにしている。

これにより、天守台の北面、西面の大部分が積み替えられたことがわかる。また、具体的な工法の分析から、天守台表面に現れる間詰石がほとんどなくなり、築城時の遺構の積み方とは異なっていることが明らかにされている。加えて東面の一部、南面の一部も積みかえられ、東面、南面に1カ所ずつ明り取り窓が新規に設けられている。

現在までに天守台周辺の発掘調査により、その位置は築城時から変わっておらず、また資料の分析により、現在の天守台外側の石垣は宝暦大修理後の姿を概ね留めていると判断できる。

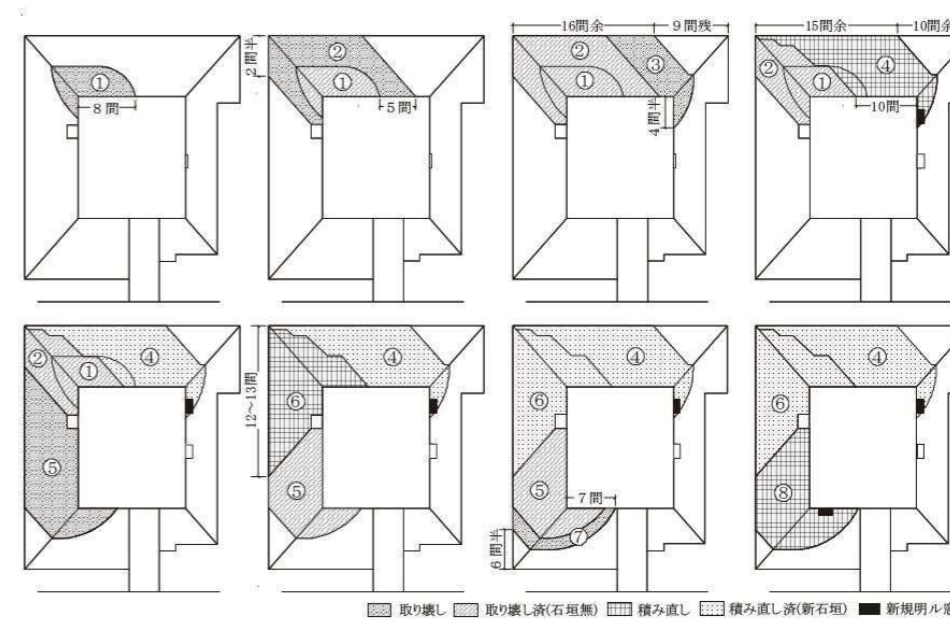


図-4.2.1 天守台解体修理工事工程説明図

（麓和善・加藤由香「名古屋城大天守宝暦大修理における石垣工事について」（『日本建築学会計画系論文集 第74巻 第645号』pp.2512 2009年11月）より引用。各図上方向が北）

(3) 遺物

① 概要

【礎石】

昭和20年の天守焼失直後は石垣の破損がひどく、崩壊の恐れもあったため昭和25年10月に愛知県教育委員会が文化財保護委員会に「名古屋城天守閣・小天守閣渡り内部石垣積換及び天端並郭内防水舗装工事」の国庫補助の申請を行い、昭和27年度～30年度の4ヶ年にわたって工事が行われ、天守の礎石も一旦再整備された。その時の状況を描いた礎石の配置図が「天主礎石配置図1/50」であり、現天守閣建設に先立ち名古屋城建設工事事務所が昭和32年5月に作成したものである。

これらの礎石は、現天守閣建設に伴い、不明門北側の御深井丸に移されて現存している。小天守の礎石の経緯等については記録がなく、不明である。

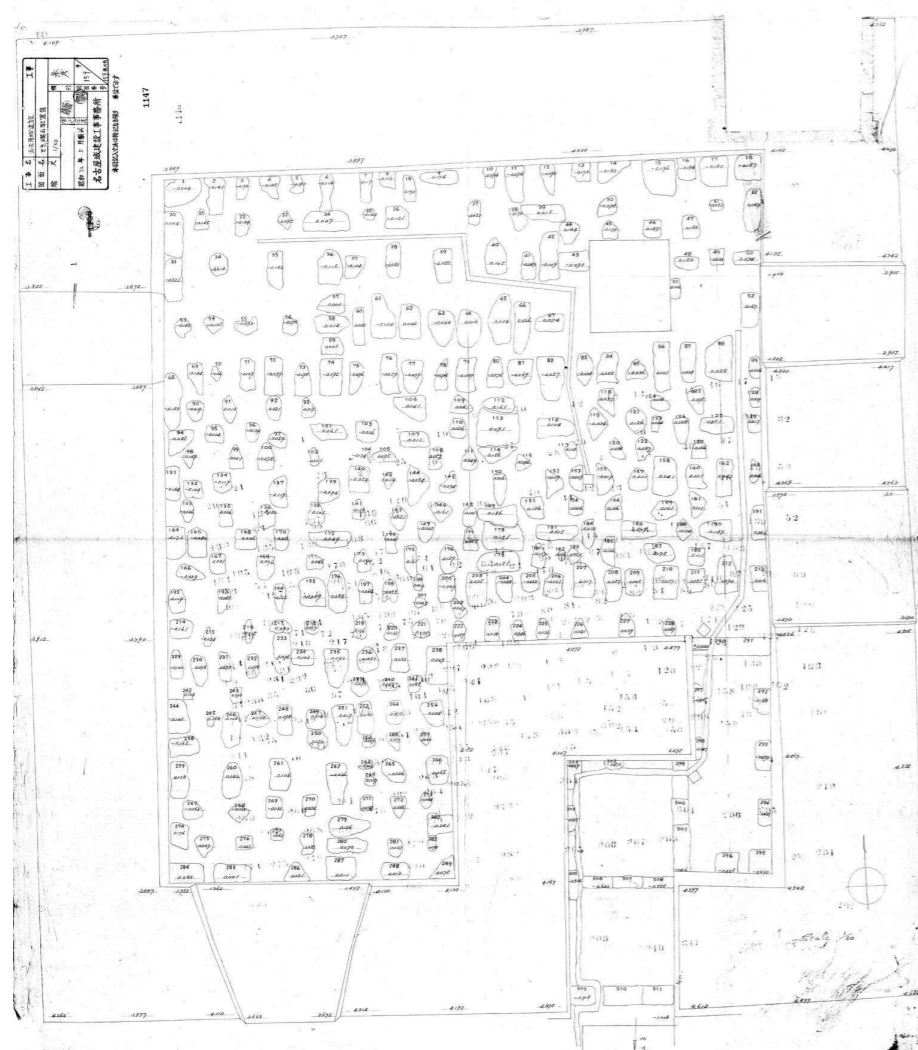


図-4.3.1 「天主礎石配置図1/50」



南面明取り方向を望む



北西隅方向を望む



東面明取り方向を望む

昭和31年穴蔵石垣積替工事終了時点で再整備された礎石  
 (出典：名古屋城天守閣跡石垣積換工事写真帖 名古屋城総合事務所蔵)

【遺物】

名古屋城には破風飾金具、鬼板、銅瓦、金鯨鱗片等の金具や土瓦が遺物として保管されており、数少ないオリジナルのものとして貴重である。

金具は焼損しており、焼損の度合は様々であるが、文様の形、寸法、断面凹凸、技法の確認ができる。また文献史料に記述されている仕上・仕様や実測図では寸法が記されない飾金具の曲線形状について、遺物との照合により、資料に記されている内容の蓋然性を示すことができる。

表-4.3.1 遺物リスト

	遺物	時代	所蔵
1	名古屋城建造材	不明	徳川林政史研究所
2	金鯨鱗	不明	名古屋城総合事務所
3	銅瓦：瓦当 (大天守五重)	江戸時代前期	
4	銅瓦：軒平唐草 (大天守五重)	江戸時代前期	
5	銅瓦：瓦当 (大天守二～四重)	宝暦年代以降	
6	銅瓦：軒平唐草 (大天守二～四重)	宝暦年代以降	
7	銅製鬼板 (大天守五重)	江戸時代前期	
8	銅製鳥衾 (大天守五重)	江戸時代前期	
9	青銅製鬼板 (大天守二～四重)	宝暦年代以降	
10	青銅製鳥衾 (大天守二～四重)	宝暦年代以降	
11	破風板飾金具 (大天守)	江戸時代前期	
12	破風板飾金具 (大天守)	宝暦年代以降	
13	窓格子鉄板	不明	
14	土瓦	不明	
15	土瓦：軒丸瓦	不明	
16	土瓦：丸瓦	不明	
17	土瓦：平瓦	不明	
18	土瓦：平唐草瓦	不明	

## ②分析の概要

## 【礎石】

「天守礎石配置図」と昭和実測図、古絵図の比較から、地階では柱直下に礎石を据えていたと分る。「天守礎石配置図」では礎石に311までの通し番号が振られており、最も大きい礎石は113番で、これは宝暦年間に行われた大修理に際して書かれた絵図で「大黒柱」と記された柱直下の礎石であることがわかる。

礎石の多くは南北方向に長い。この上に東西方向に地階大引を架けるためである。昭和実測図の48「地階平面図」では地階北西では大引を1間間隔で配し、一方で地階南西の五～九通りでは2間を三つ割りして大引を配しているが、「天守礎石配置図」でも同様の東石配置となっており48「地階平面図」の大引配置が正しい事を裏付けている。

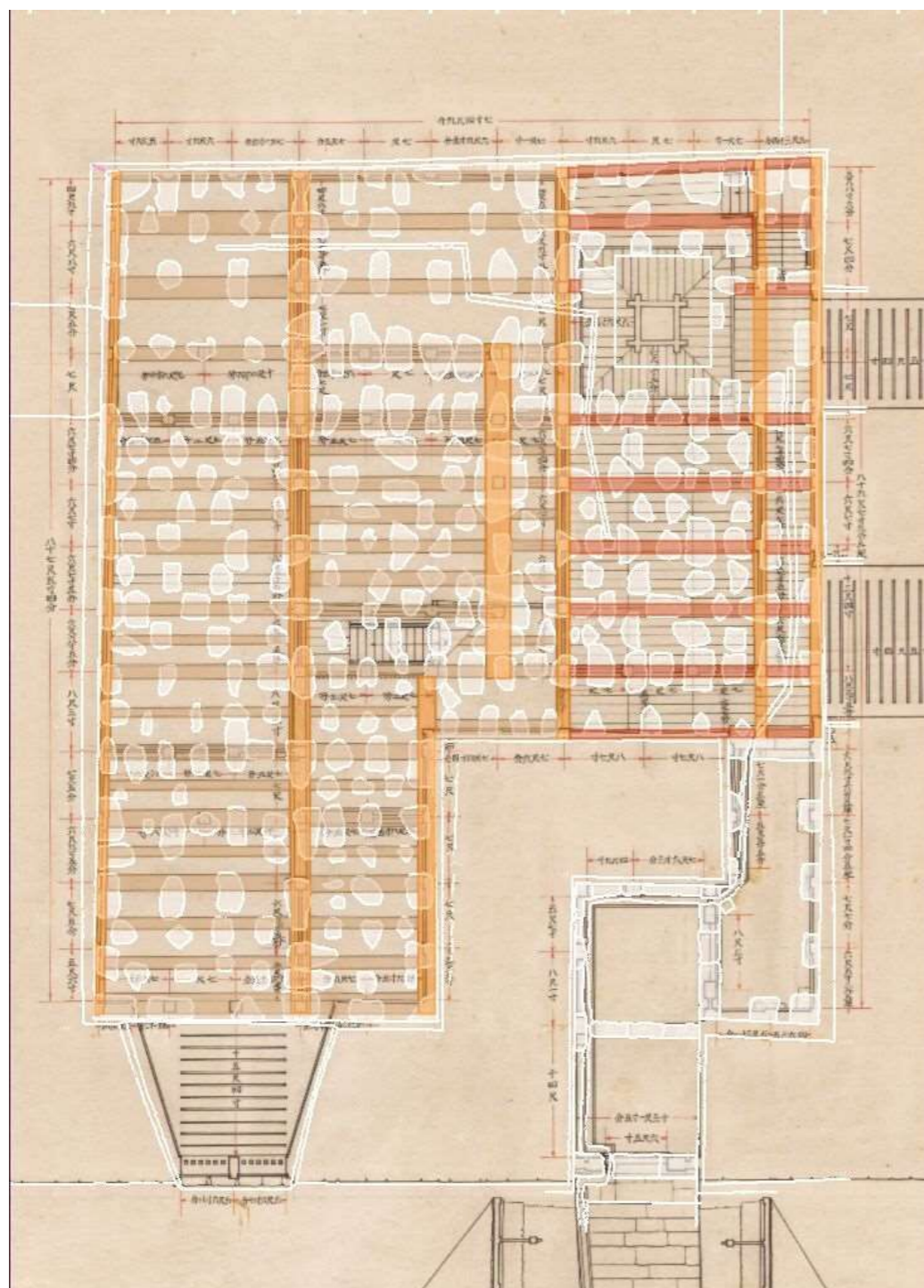


図-4.3.2 「天守礎石配置図」と昭和実測図「地階平面図」の重ね合わせによる礎石配置図の確かさの検証

## 【遺物】

## 【軒巴銅瓦】

焼損遺物として遺っている軒巴銅瓦は大多数が縁部分も含め一体的に作られ、また葵紋と縁以外の地の部分については文様は無い。また数点ではあるが、やや直径が小さく、縁のない葵紋で地に菊石目が打たれた平板状のもの、葵紋の平板部の無い、縁廻りだけのものがある。平板状の葵紋については、破風板の飾金具に多数設えられている葵紋とも考えられたが、奈良文化財研究所所蔵の摺本により、これが五重の軒巴瓦であることが裏付けられた。

これにより文献史料によりわかっている、築城時から銅瓦葺であった五重と、宝暦大修理で土瓦葺きから銅瓦葺きに葺き替えられた二重～四重で、寸法・技法・納まりが異なっていたことが裏付けられる。

## 【平唐草銅瓦】

古写真で、二重から四重の軒平唐草銅瓦の紋様についておおよその見当はつくが、その凹凸、地の部分の仕様についてまでは判明しない。今回、名古屋城総合事務所所蔵の焼損遺物を検討して行く中で、二重から四重の平唐草銅瓦について、古写真と同じと思われる遺物が2点判明し、その寸法、紋様の根拠となる。

五重の平唐草銅瓦の紋様等については、古写真では把握することができない。しかし、現天守閣では五重の平唐草銅瓦の紋様が二重～四重とは異なっており、その根拠が不明であった。これについても、今回の遺物検討の中で、二重から四重の平唐草銅瓦の遺物とは紋様や銅板厚の異なる遺物が1点判明した。これは二重から四重の平唐草銅瓦遺物と異なり、地の模様が打たれている。軒平唐草銅瓦に軒巴銅瓦が被っていた部分には地の模様が打たれていないことから、軒巴銅瓦の軒平唐草銅瓦への被り方がわかり、遺物の中寸法と、古写真、昭和実測図から推定できる割付寸法、見付寸法との照合により、五重の平唐草銅瓦と判断でき、寸法、紋様の根拠となる。

## 【五重箱棟鬼板】

五重箱棟の鬼板は、古写真より青海波が彫られた銅板によるものとわかる。また文献史料よりその青海波は毛彫りされており、鬼板全体が減金されていたと記されている。現在進めている遺物調査の中で青海波が彫られた焼損遺物が1点確認され、古写真との青海波の寸法比較により、五重鬼板の遺物であると判断した。今後、成分分析により、鬼板の仕上げが金メッキであったかについても確認していく。

## 【破風板飾金具】

古写真、昭和実測図、文献史料により破風板の飾金具は銅板で包まれ、大小多数の葵紋が設えられていることがわかる。また古写真により飾金具の銅板分割位置について、ある程度は確認することができる。しかし、その紋様の凹凸、地の模様の有無は判明しない。

名古屋城総合事務所所蔵の遺物を、原寸大に拡大した昭和実測図と、形状の特徴を頼りに重ね合わせながら検証していくと、どの階の破風板飾金具であるか明確にわかる程の一致を見ており、遺物が破風板飾金具であることが判明すると同時に、昭和実測図で破風詳細立面図に書かれている飾金具の形が正確であることがわかる。

古写真では判明しなかった葵紋の凹凸、技法の他、地の模様として菊石目が打たれていたことが判明した。

(4)古写真

①概要

名古屋城には焼失前に撮影された多数の古写真があり、幕末から明治、大正を経て昭和期初期に名古屋城が名古屋市に下賜されるまでに撮影された写真が徳川林政史研究所、東京国立博物館、宮内庁書陵部、宮内公文書館の各所に所蔵されている。

名古屋城の建造物を対象とした撮影は、名古屋市によって最も体系的な撮影が行われた。昭和14年6月の名古屋城保存管理調査委員会提案に基づき、名古屋市は御下賜10周年記念図録の刊行とそれに先立つガラス乾板による写真撮影を決定した。撮影者は村沢文雄氏、編集は文部省宗教局に委嘱し、同局係員服部勝吉氏が派遣された。この名古屋市による撮影で城内の写真565枚が撮影されており昭和17年6月に『国宝名古屋城図録』として出版された。(図版として載せられたのは撮影された565枚のうち約180枚)。その後、ガラス乾板の一部が空襲で失われたり、また他機関所蔵の写真を複製するなどの増減もあり現在名古屋城には738枚のガラス乾板が所蔵されており、その内、天守を撮影したものは79枚ある。

御下賜10周年記念事業として刊行された『国宝名古屋城図録』よりも先に一般の書籍として刊行された写真集が、國寶建造物刊行会より刊行された『國寶建造物第一期第一輯 名古屋城天守及小天守』(昭和8年7月)と古建築及庭園研究会より刊行された『日本古建築類聚名古屋城』(昭和8年8月)である。それぞれに名古屋城所蔵ガラス乾板写真とは異なるカットが含まれており、特に前者には、名古屋城所蔵ガラス乾板写真とは別の内観写真が多数含まれている。

この他に明治期の写真家によって撮影された外観写真が長崎大学附属図書館に、また外国人によって撮影された外観写真や焼失後の天守台の写真が国会図書館や海外の美術館に所蔵されている。

こうした天守を各方向から詳細に撮影した古写真が、復元根拠として重要な資料となる。



大小天守閣（焼失）東面(名古屋城総合事務所所蔵)

表-4.4.1 古写真リスト

資料名	所蔵機関又は出版社	撮影年又は出版年	概要
徳川慶勝撮影写真	徳川林政史研究所蔵		天守については外観18枚、金鯨17枚。
壬申検査関係写真	東京国立博物館蔵	明治5年	重要文化財 ステレオ写真386枚、四切写真109枚、四切写真ガラス原板70枚の計565枚。 その内、天守については外観3枚。
大坂並名古屋鎮台写真帖	宮内庁書陵部蔵	明治20年以前	全38枚。その内、天守については外観3枚。
長崎大学附属図書館 所蔵写真	長崎大学附属図書館	明治期～	外観24枚 日下部金兵衛、玉村康三郎、玉村騎兵衛等の明治期の写真家撮影の写真の他、撮影者不明の写真も含む。
愛知県公文書館所蔵写真	愛知県公文書館所蔵	明治24年 濃尾地震直後	外観2枚 明治24年（1891）の濃尾地震直後の様子を撮影した外観2枚。
名古屋城天守閣修繕写真	宮内庁公文書館蔵	明治25年撮影	全5枚 濃尾地震後の修理工事の様子を撮影した5枚。
蟻害調査写真帳 名古屋離宮 二条離宮（写真帳）／大正・昭和	宮内庁公文書館蔵	大正6年	全56枚。天守については小天守外観1枚、内観3枚の計4枚。名古屋城内の各建物の蟻害の様子を撮影したもの。
『國寶建造物第一期第一輯 名古屋城天守及小天守』	國寶建造物刊行会	昭和8年7月	全27枚。大天守外観7枚、内観11枚。小天守外観4枚、内観3枚。
『日本古建築類聚 名古屋城』	古建築及庭園研究会	昭和8年8月	全25枚。その内、天守については外観3枚、天守台1枚の計4枚。
名古屋城総合事務所所蔵ガラス乾板写真	名古屋城総合事務所所蔵	昭和15年度～	全738枚。 その内、天守については外観55枚、内観22枚、天守焼失後の天守台2枚の計79枚。名古屋城所蔵ガラス乾板写真に東京国立博物館所蔵のガラス乾板写真を加えた大部分の写真が平成12年(2000年)に『懐古名古屋城』として名古屋城振興協会から刊行されている。



天守閣（焼失）南面



天守閣（焼失）東面北寄部分



天守閣一階内西入側（焼失）



天守閣五階内長押上（焼失）



天守閣一階内橋台上南側の石落及び鉄砲狭間（焼失）



天守閣二階内西入側（焼失）



天守閣三階内西側千鳥破風内（焼失）



天守閣四階内階段（焼失）

(5) 近代実測図

① 概要

[昭和実測図]

名古屋城には戦前の実測に基づいて作成された実測図282枚(ケント紙・墨書・一部朱入り、縦68.0cm横98.5cmまたは縦98.5cm横98.5cm)が現存しており、それらは総称して「昭和実測図」と呼ばれ、天守については大天守56枚、小天守15枚の計71枚の図面が作成されている。この実測図により焼失前の天守について、具体的且つ詳細な寸法が確認できる。

・経緯

名古屋城が名古屋市に下賜された後、昭和7年から名古屋市の事業として実測が開始され、名古屋市土木部建築課が担当した。昭和16年度には文部省宗教局保存課から、高橋政雄・市川岩雄両氏が名古屋城に派遣され45日間の実測調査が行われている。作業は戦時中に一時中断されたが、戦後の昭和27年1月に製図が完了している。

川崎市立日本民家園の大岡<sup>みのる</sup>博士文庫にある戦時下の名古屋城防空対策に関する打合議事録中に、名古屋城内の建物実測について次のような意見が出された事が記録されており、戦争での焼失の覚悟、そして焼失した場合には実測図を基にして復元がなされることが期待されていたことがわかる。

「此ノ業(引用者注:名古屋城実測事業)ハ今日ノ時局ヲ予想シテ行ハレタルモノニ非ザルモ万一空襲ニヨリ破損シタル場合ノ復旧又万一大破壊ヲ来シタル時ノ記録トシテ頗ル貴重ナルモノニシテ今日ソノ完成ヲ見得ルハ頗ル幸ナル事ナリ。

猶会キノ席上市民ニ対シテ名古屋城ハ破壊スルモ何時ニテモ復旧シ得ル準備アリト宣傳スルハ市民ヲ安心セシムル方法トシテ効果アラン等ノ談モアリタリ、」

[野帳]

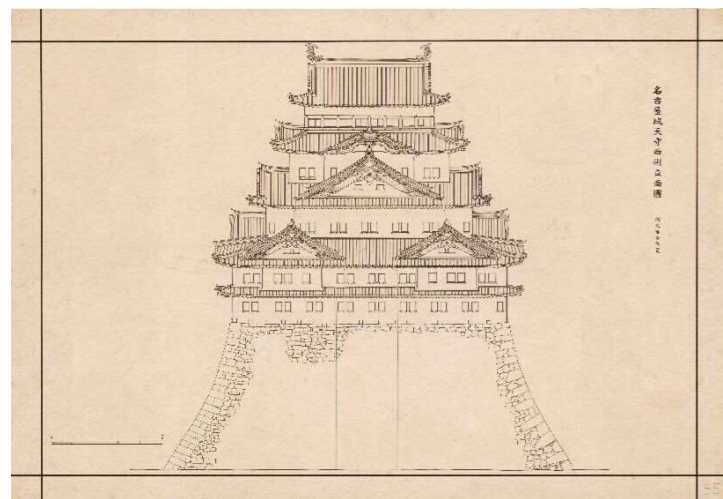
昭和の実測作業時に描かれた計279枚の野帳が各ブロックごとにまとめられている。昭和実測図には無い実測数値が書かれており重要な復元根拠となる。

大天守および小天守の野帳は、主に下記の綴りにまとまっている。

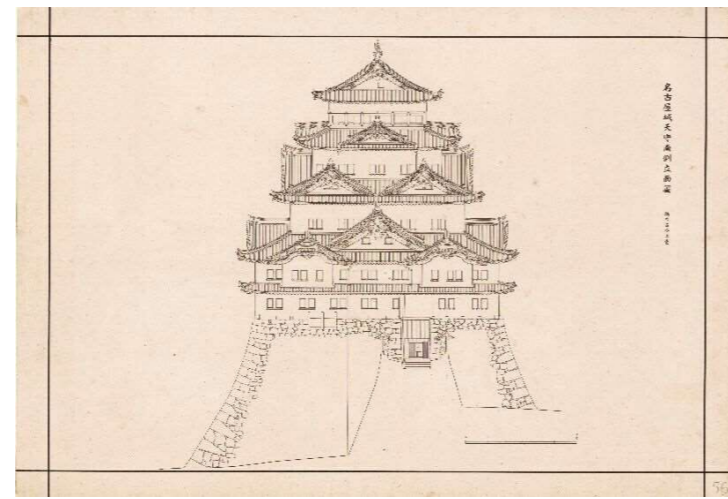
表-4.5.1 野帳リスト

区分	表紙	員数	内容・仕様
大天守	昭和十二年調 天守閣傾斜測定図 木工部建築課	19	昭和12年~18年の天守傾斜測定、昭和14年の蟻害調査、昭和18年の天守西北隅の石垣実測、昭和18年の東北隅櫓傾斜測定。 菊4切(47×32cm)
	二層北側 唐破風千鳥破風	39	大天守二階・三階の千鳥破風・唐破風の詳細図 菊4切(47×32cm)
	口御門	16	大天守地階の口御門周囲から橋台までの詳細図 菊4切(47×32cm)
小天守	小天守閣 其一	63	「小天守閣其一」部分詳細 四六八切(39×27cm)
	小天守閣 其二	18	「小天守閣其二」部分詳細 四六八切(39×27cm)
	小天守閣 其三	21	「小天守閣其三」部分詳細 四六八切(39×27cm)
	小天守閣	38	各階平面、各階見上げ、軒詳細など 菊4切(47×32cm)

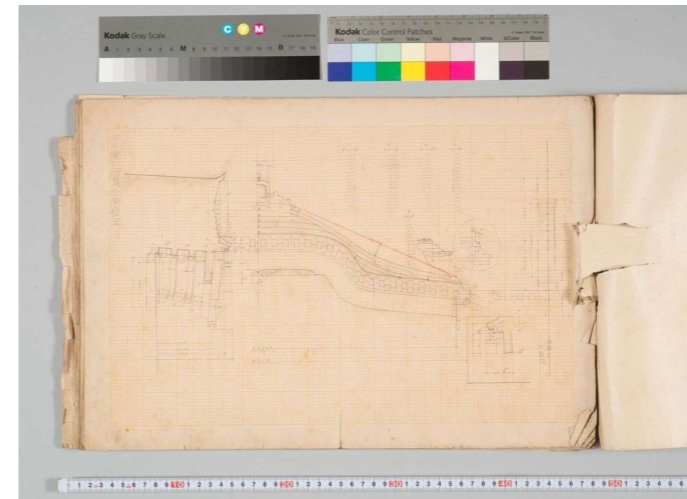
大天守の野帳は千鳥破風の詳細と地階詳細などで、全体の平面や断面に関する野帳は無く、建物内部の柱・梁などの情報はあまり得られない。一方の小天守については部分詳細だけでなく全体平面・全体見上げの野帳もある。



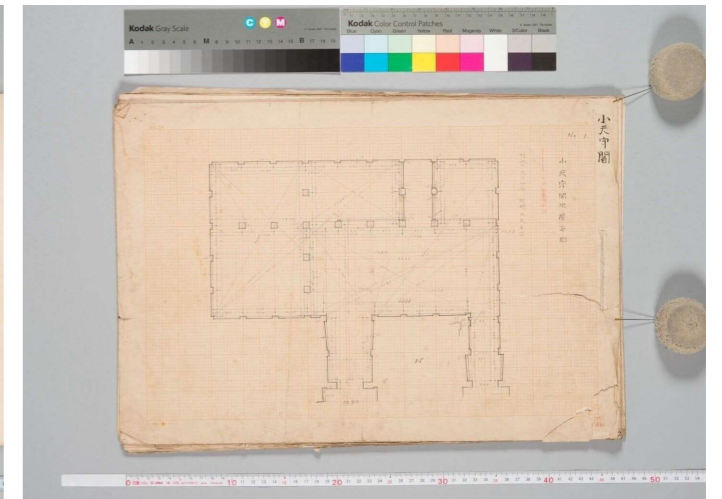
「名古屋城天守西側立面圖 縮尺百分之壹」  
(名古屋城総合事務所蔵)



「名古屋城天守南側立面圖 縮尺百分之壹」  
(名古屋城総合事務所蔵)



「天守閣二層北側唐破風」  
(名古屋城総合事務所蔵)



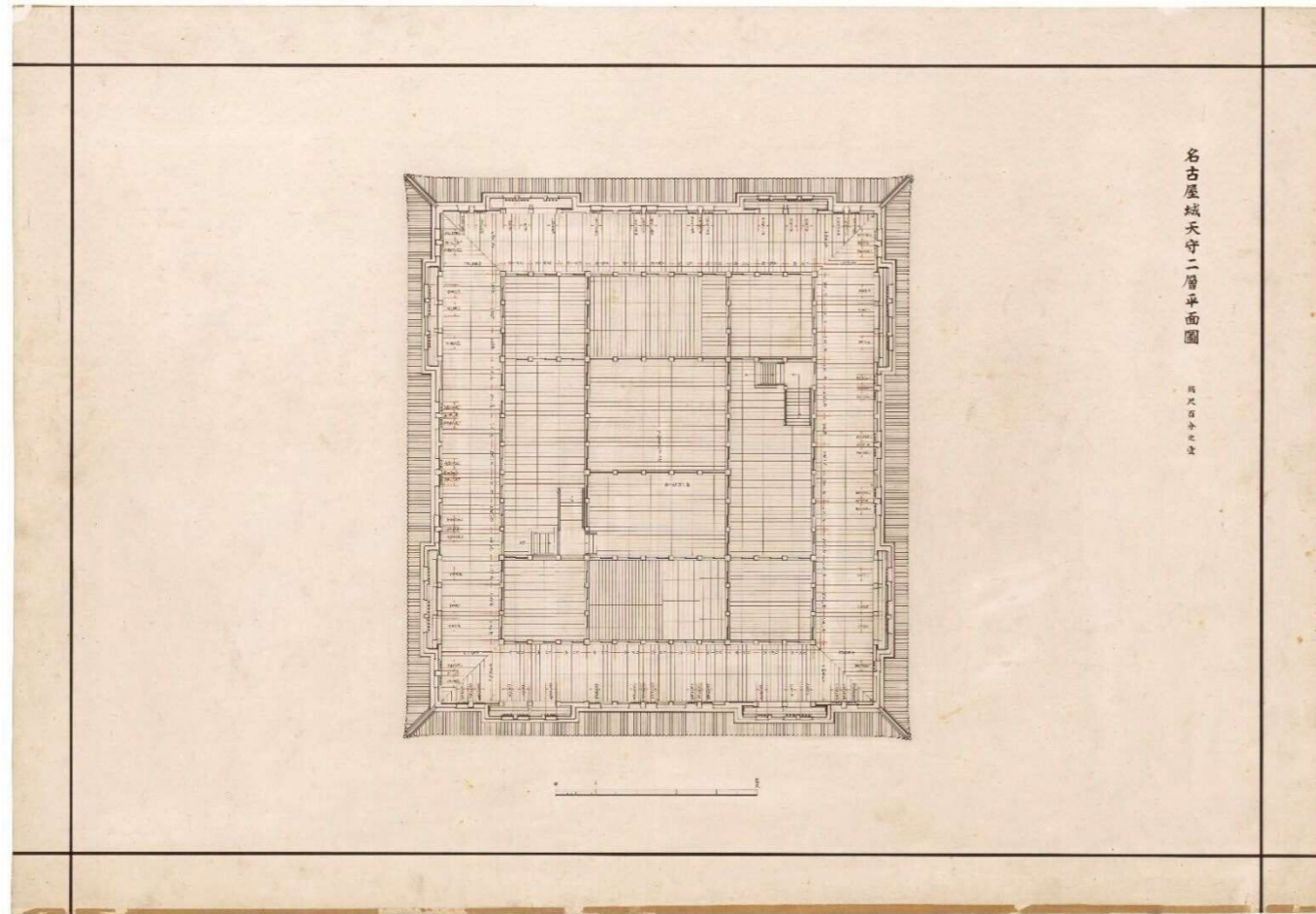
「名古屋城小天守地階平面図」  
(名古屋城総合事務所蔵)

表-4.5.2 昭和実測図（大天守・小天守）一覧

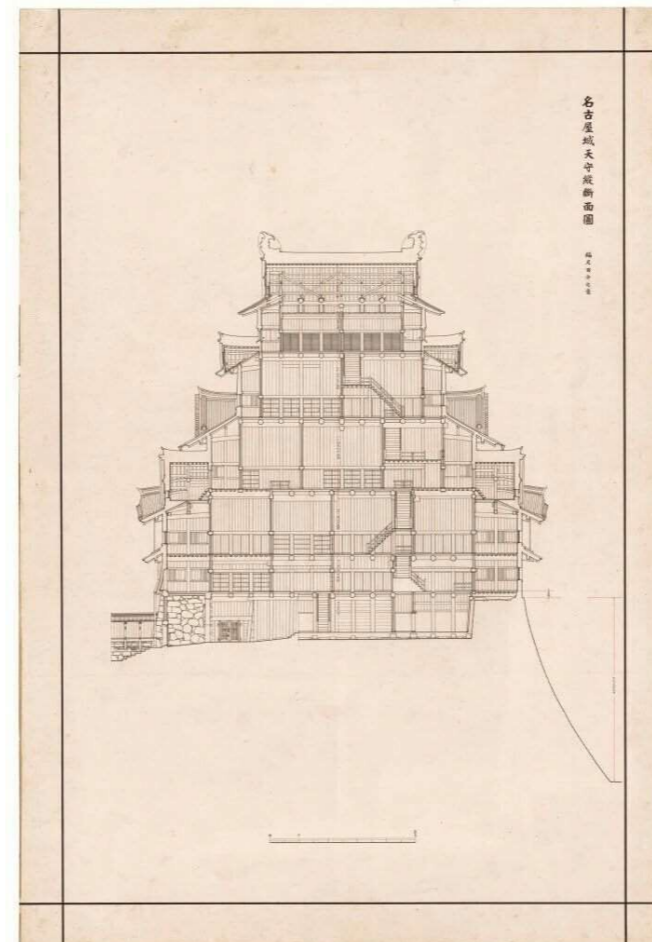
通番	名称	縮尺	備考	マイクロ No.
48	名古屋城天守地階平面図	1/100		B0460100
49	名古屋城天守一階平面図	1/100	図面上は、初層と記載	B0470200
50	名古屋城天守二層平面図	1/100		B0480300
51	名古屋城天守三層平面図	1/100		B0490400
52	名古屋城天守四層平面図	1/100		B0500500
53	名古屋城天守五層平面図	1/100		B0510600
54	名古屋城天守東側立面図	1/100		B0520700
55	名古屋城天守西側立面図	1/100		B0530800
56	名古屋城天守南側立面図	1/100		B0540900
57	名古屋城天守北側立面図	1/100		B0551000
58	名古屋城天守縦断面図	1/100		B0561100
59	名古屋城天守横断面図	1/100		B0571200
60	名古屋城天守地階及初層東側矩計詳細図	1/20		B0581300
61	名古屋城天守二層及三層東側矩計詳細図	1/20		B0591400
62	名古屋城天守四層及五層東側矩計詳細図	1/20		B0601500
63	名古屋城天守初層床伏図	1/100		B0611600
64	名古屋城天守初層見上図	1/100		B0621700
65	名古屋城天守二層見上図	1/100		B0631800
66	名古屋城天守三層見上図	1/100		B0641900
67	名古屋城天守四層見上図	1/100		B0652000
68	名古屋城天守五層見上図	1/100		B0662100
69	名古屋城天守地階東側出窓平面及断面詳細図（平面図・断面図）	1/20		B0672200
70	名古屋城天守地階東側出窓装置詳細図（内部姿図・内部窓図・伊伊断面・揚戸詳細・滑車詳細・窓断面詳細・棧框断面・外部姿図）	1/20		B0682300
71	名古屋城天守二層東側千鳥破風平面詳細図	1/20		B0692400
72	名古屋城天守二層東側千鳥破風姿詳細図	1/20		B0702500
73	名古屋城天守二層東側千鳥破風縦断面詳細図	1/20		B0712600
74	名古屋城天守二層東側千鳥破風横断面詳細図	1/20		B0722700
75	名古屋城天守二層北側中央千鳥破風平面詳細図（イ・イ横断面図・ロ・ロ横断面図）	1/20		B0732800
76	名古屋城天守二層北側中央千鳥破風姿詳細図	1/20		B0742900
77	名古屋城天守二層北側中央千鳥破風縦断面詳細図	1/20		B0753000
78	名古屋城天守二層北側唐破風平面及姿詳細図（槍狭間揚板詳細図・イ印部分詳細図・ロ印部分詳細図・ハ印部分詳細図）	1/20		B0763100
79	名古屋城天守三層西側千鳥破風平面及小屋内部詳細図（内部イ・内部ロ・平面図）	1/20		B0773200
80	名古屋城天守三層西側千鳥破風四層唐破風詳細図	1/20		B0783300
81	名古屋城天守三層南側千鳥破風平面及小屋内部詳細図（内部イ・内部ロ・平面図）	1/20		B0793400
82	名古屋城天守三層南側千鳥破風姿及断面詳細図	1/20		B0803500
83	名古屋城天守四層西側唐破風姿及断面詳細図	1/20	図面上は、南側と記載	B0813600
84	名古屋城天守四層西側唐破風断面詳細図	1/20		B0823700
85	名古屋城天守五層南妻破風姿及断面詳細図	1/20		B0833800

通番	名称	縮尺	備考	マイクロ No.
86	名古屋城天守地階御口御門平面及見上図并断面図（断面図・見上図・平面図・金具現寸図）	1/20		B0843900
87	名古屋城天守地階御口御門正面及背面詳細図（正面図・背面図）	1/20		B0854000
88	名古屋城天守地階奥御門平面及背面詳細図（平面図・背面図）	1/20		B0864100
89	名古屋城天守地階奥御門正面及断面詳細図（正面図・断面図）	1/20		B0874200
90	名古屋城天守地階初層及二層表階段平面詳細図（地階階段平面図・初層階段平面図・二層階段平面図）	1/20		B0884300
91	名古屋城天守三層及四層表階段平面詳細図（三層階段平面図・四層階段平面図）	1/20		B0894400
92	名古屋城天守初層及二層表階段平面詳細図（初層二層口・口断面図・地階々段イ・イ断面図）	1/20	図面上は、天守地階初層～断面詳細図と記載	B0904500
93	名古屋城天守二層表階段断面詳細図（引戸詳細図）	1/20		B0914600
94	名古屋城天守三層表階段断面詳細図	1/20		B0924700
95	名古屋城天守四層表階段断面詳細図	1/20		B0934800
96	名古屋城天守四層表階段矢狭間詳細図（金具・金具・蝶番詳細図・揚板裏面・揚板見上図・平面図・伊・伊断面図・手掛金具）	1/20		B0944900
97	名古屋城天守地階御成階段平面及断面詳細図（平面図・断面図）	1/100		B0955000
98	名古屋城天守初層及二層御成階段平面詳細図（初層階段平面図・二層階段平面図）	1/20		B0965100
99	名古屋城天守初層及二層御成階段断面詳細図	1/20		B0975200
100	名古屋城天守五層小屋組詳細図	1/20		B0985300
101	名古屋城天守南側銃詳細図	1/10		B0995400
102	名古屋城天守北側銃詳細図	1/10		B1005500
103	名古屋城天守金具詳細図	1/1		B1015600
104	名古屋城小天守地階平面図	1/50		B1020100
105	名古屋城小天守初層平面図	1/50		B1030200
106	名古屋城小天守二層平面図	1/50		B1040300
107	名古屋城小天守東側立面図	1/50		B1050400
108	名古屋城小天守西側立面図	1/50		B1060500
109	名古屋城小天守南側立面図	1/50		B1070600
110	名古屋城小天守北側立面図	1/50		B1080700
111	名古屋城小天守縦断面図	1/50		B1090800
112	名古屋城小天守横断面図	1/50		B1100900
113	名古屋城小天守矩計詳細図	1/20		B1111000
114	名古屋城小天守初層床伏図	1/50		B1121100
115	名古屋城小天守二層床見上図	1/50		B1131200
116	名古屋城小天守二層天井見上及屋根伏図	1/50		B1141300
117	名古屋城小天守東出入口詳細図	1/20		B1151400
118	名古屋城小天守西出入口及窓廻詳細図（西出入口詳細図・初層北側西寄窓詳細図・二層東側北寄窓詳細図）	1/10 1/20	図面上は、（西出入口詳細図・初層北側西寄窓詳細図・二層東側北寄窓詳細図）の記載無し	B1161500

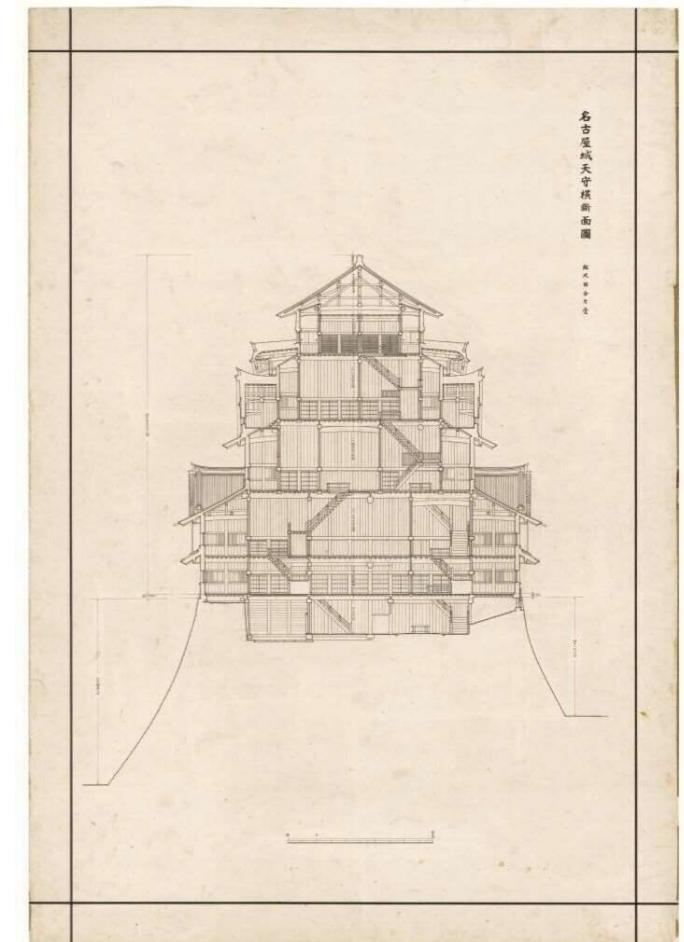




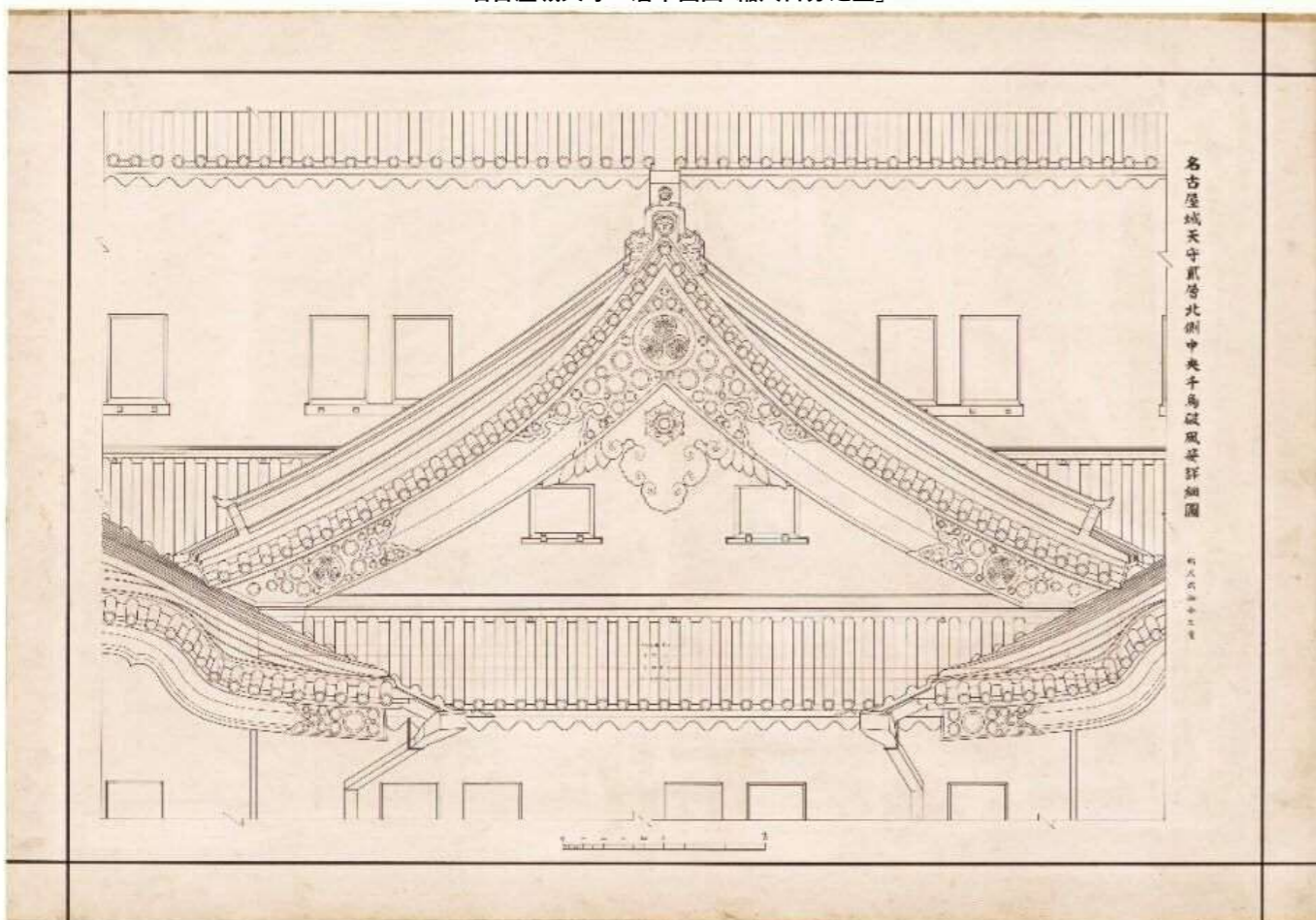
50「名古屋城天守二層平面図 縮尺百分之壹」



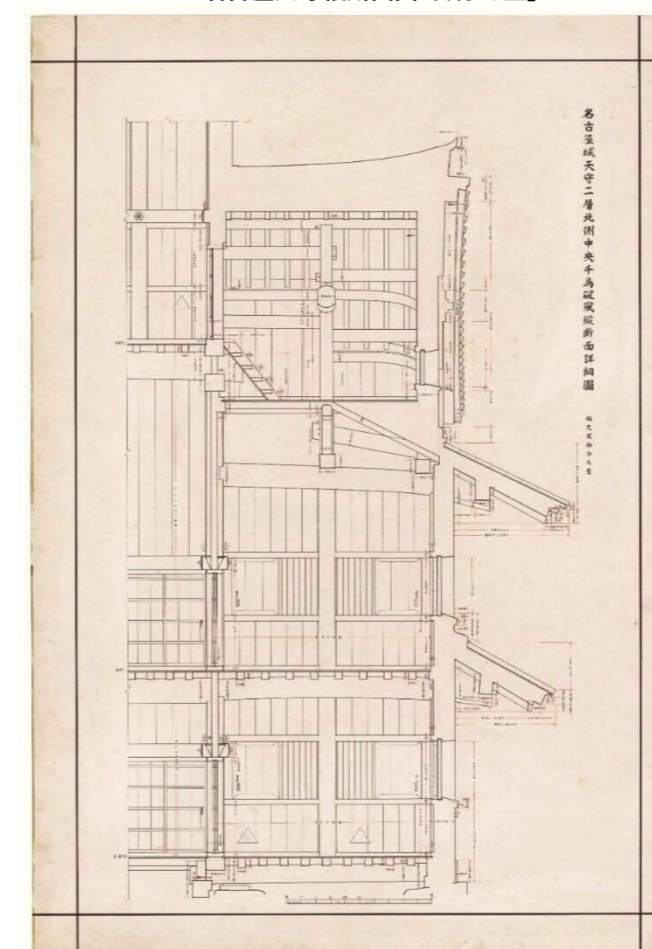
58「名古屋天守縦断面図 百分之壹」



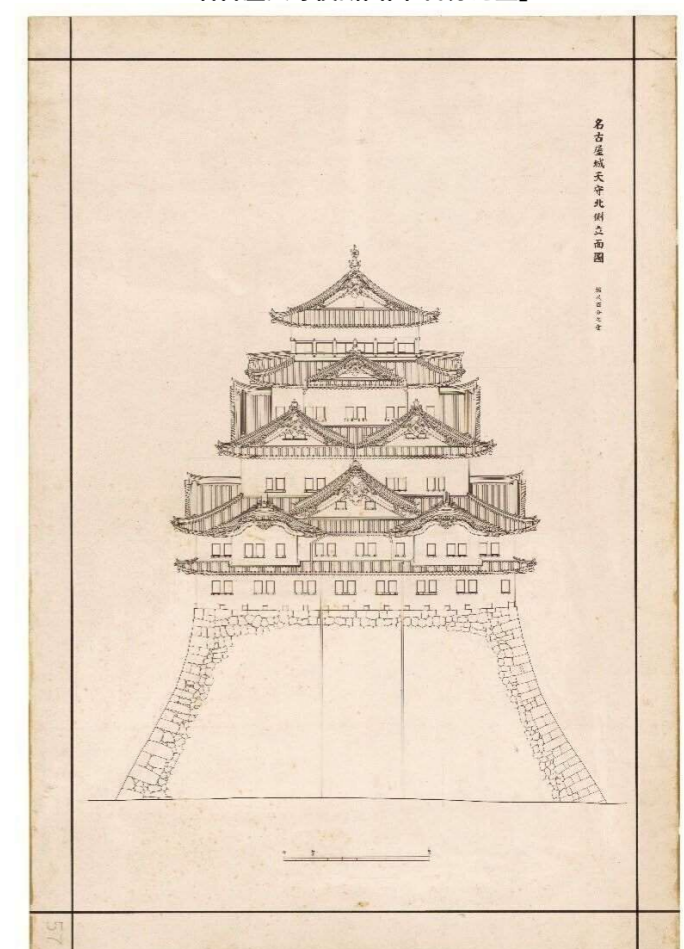
59「名古屋天守横断面図 百分之壹」



76「名古屋城天守二層北側中央千鳥破風姿詳細図 貳拾分之壹」



77「名古屋城天守二層北側中央千鳥破風縦断面詳細図 貳拾分之壹」



57「名古屋天守北側立面図 百分之壹」

(6) 摺本・拓本

①概要

昭和実測図作成の際にとられた以下の摺本、拓本が奈良文化財研究所、名古屋城総合事務所に所蔵されており焼損遺物、古写真との照合により飾金具形状、寸法、文様を特定することができる。

②分析の概要

【五重軒巴瓦】

遺物として多数遺っている軒巴銅瓦は縁部分も含め一体的に作られ、葵紋と縁以外の地の部分については文様は無い。しかし摺本により、五重軒巴瓦は縁と瓦当(がとう)面が分割されており、葵紋周辺の地の部分に菊石目の紋様が多打たれていたことがわかる。遺物の中に数点、この摺本の仕様と合うものがあり、これらの遺物が五重軒巴銅瓦であると裏付けられる。

文献史料より、五重のみ築城時より銅瓦葺であったことがわかり、古写真より五重での銅瓦の葺き方が二～四重とは異なることがわかるが五重の軒先については古写真ではわからない。古写真では確認ができない五重の軒先巴銅瓦の詳細について、二～四重とは製作方法、技法が異なっていた根拠となる。

【隅裏甲飾金具】

古写真、昭和実測図で確認できる隅裏甲飾金具について寸法、曲線部形状、分割寸法を具体的に特定できる。

【鬼板・鳥衾】

古写真で確認できる鬼板、鳥衾の葵紋について、平面的な詳細寸法、形状を特定できる。

【破風板飾金具】

古写真、昭和実測図で確認できる破風板飾金具の葵紋について、平面的な詳細寸法、形状を特定でき、遺物により破風板飾金具の仕様、断面的な凹凸、技法、文献史料により仕上がわかり破風板飾金具を総合的に特定することができる。

【内部六葉】

古写真、昭和実測図で基本的な寸法、文様を確認できるが、文様以外の地の部分に打たれている魚々子について、大きさ、密度、打ち並べ方を特定することができる。

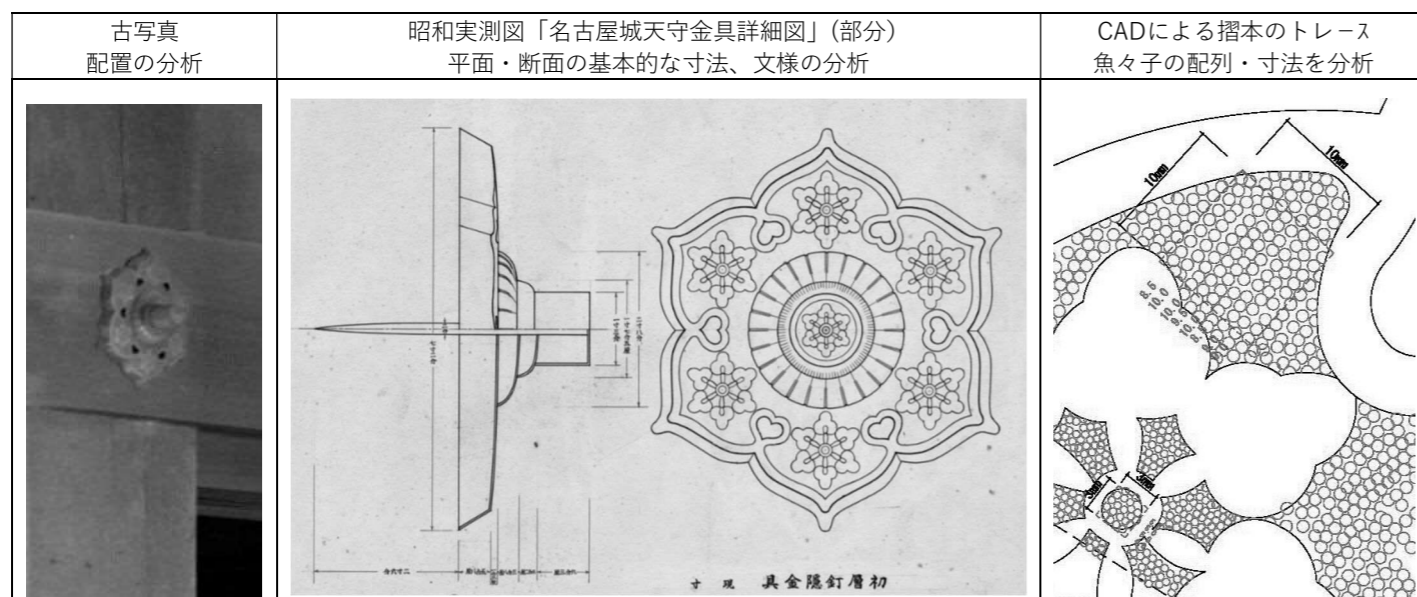


表-4.6.1 奈良文化財研究所蔵 名古屋城天守摺本拓本リスト

番号	部材名称	形式	部材位置	番号	部材名称	形式	部材位置
1	六葉	拓本	四層	19	飾金具	摺本	初層東面茅負
2	六葉	拓本	四層	20	飾金具	摺本	初層東面茅負
3	六葉	拓本	初層	21	鬼板	摺本	初層東北隅
4	六葉	図	参層四層	22	鬼板	摺本	初層北東隅
5	六葉	図	初層式層	23	鬼板	摺本	初層東北隅
6	鬼板	拓本	式層東面千鳥破風南降棟鬼板紋様	24	鬼板	摺本	二層東面千鳥降棟
7	木鼻	図	五層	25	鬼板	摺本	二層東北隅
8	桁	摺本	五層見番台側	26	鬼板	摺本	二層東北隅
9	虹梁	摺本	西廊下	27	飾金具	摺本	初層東面茅負
10	実曲線	摺本	地層階段実曲線	28	飾金具	摺本	二層東面茅負
11	手摺	摺本	式層御成階段踊場手摺(左上)	29	海鼠曲線	摺本	二層東北隅軒先
12	手摺	摺本	式層御成階段手摺(下り)	30	巴瓦	摺本	二層
13	手摺	摺本	参層御成階段上部手摺(右上)	31	門金物	摺本	口御門潜戸
14	飾金具	拓本	五層北面巴瓦	32	門受金物	摺本	口御門潜戸
15	飾金具	拓本	天守閣千鳥破風	33	門金物	摺本	口御門大扉
16	飾金具	摺本	式層東面千鳥破風	34	門受金物	摺本	口御門大扉
17	鳥衾	摺本	式層東北隅	35	飾金具	摺本	口御門大扉肘壺
18	階段	摺本	五層見番台	36	飾金具	摺本	奥御門大扉肘壺
				37	飾金具	摺本	奥御門潜戸肘壺

表-4.5.2 名古屋城総合事務所蔵 名古屋城天守摺本拓本リスト

番号	部材名称	形式	部材位置	番号	部材名称	形式	部材位置
1	懸魚	摺本	二層東面千鳥	24	石垣	摺本	大天守西北角北側石垣上ヨリハッ目石拓本
2	鬼瓦	摺本	二層北面唐破風	25	石垣	摺本	北西角北側石垣石上ヨリハッ目破レ石拓本
3	懸魚	摺本	二層北面千鳥破風	小天守			
4	鬼瓦	摺本	二層東面千鳥破風	1	鬼板	摺本	
5	鬼瓦	摺本	二層東面千鳥破風(めくり)	2	懸魚	拓本	西面大棟破風懸魚拓本(表)
6	鬼瓦	拓本	二層東面千鳥破風南降棟	3	懸魚	摺本	西面大棟破風懸魚拓本(裏)
7	鬼瓦	拓本	二層東面千鳥破風降棟(めくり)	4	六葉	摺本	二層南面千鳥破風懸魚六葉拓本
8	鬼瓦	摺本	二層東面千鳥破風大棟鬼瓦裏側(鱗裏側)	5	懸魚	摺本	
9	鬼瓦	摺本	二層北面千鳥破風下棟	6	懸魚	摺本	二層南面千鳥破風懸魚拓本
10	鳥衾	摺本	二層北面唐破風鳥衾	7	鬼板	拓本	鬼瓦左鱗拓本
11	鬼瓦	摺本	二層北面千鳥破風(表)	8	鬼板	拓本	鬼瓦拓本
12	鬼瓦	摺本	二層北面千鳥破風(裏)	9	鬼板	拓本	鬼瓦右鱗拓本
13	鬼瓦	摺本	二層千鳥破風(左鱗)	10	鬼板	拓本	鬼瓦拓本
14	八双金物	摺本	二層東面千鳥破風八双金物	11	鬼板	拓本	鬼瓦右鱗拓本
15	八双金物	摺本	二層千鳥破風板八双金物	12	鬼瓦	摺本	南面千鳥破風下り棟鬼瓦拓本
16	拝み金物	摺本	二層東面千鳥破風板頂部	13	鬼板	摺本	大屋根降り棟鬼瓦拓本
17	八双金物	摺本	二層北面唐破風八双金物下(表)	14	鬼板	摺本	隅棟鬼板拓本
18	八双金物	摺本	二層北面唐破風八双金物下(裏)	15	鬼板	摺本	大屋根降り棟鬼瓦拓本
19	八双金物	摺本	二層北面唐破風八双鉄物	16	鬼板	拓本	鬼瓦拓本「濃州厚見郡岐阜住…」
20	八双金物	摺本	二層北面唐破風尻東側軒先飾り八双金物	17	鬼板	拓本	東面妻部北降り棟鬼瓦拓本
21	八双金物	摺本	二層北面唐破風西側軒先八双金物	18	鬼瓦	摺本	千鳥破風鬼瓦拓本
22	鬼瓦	摺本		19	鬼瓦	摺本	大棟鬼瓦拓本
23		摺本	天守拓本「寶曆四年…」(刻字)	20	鬼瓦	摺本	初層東北隅棟鬼瓦拓本
				21	鬼板	摺本	降り棟鬼瓦拓本

(7) 古絵図

①概要

宝暦2年～同5年に行われた名古屋城天守の大修理に際して各種の史料、絵図が作成されており、これについては麓和善・加藤由香「名古屋城大天守宝暦大修理に関する史料と修理計画について」(『日本建築学会計画系論文集第74巻 第638号』pp.937-943 2009年4月)で史料の伝来と転写関係、史料に記された工事内容や過程、仕様が詳細に分析されている。

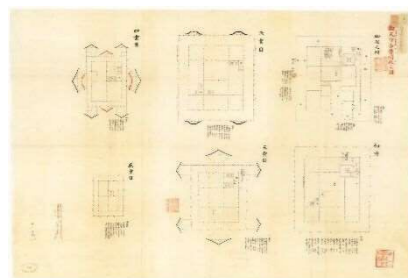
これら史料により創建時から変わった部分、全体の仕様、石垣修理の範囲と工法など工事内容全般が詳細にわかると同時に、焼失前に撮影されたガラス乾板写真や昭和実測図と照らし合わせて分析することで、宝暦の大修理以降、焼失前まで天守は基本的にその姿を変えていないことを確認することができる。

②分析の概要

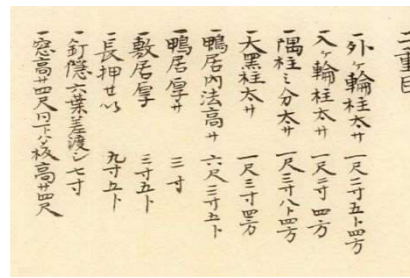
- ・間取り、柱間：離宮期の大正8年に作図された実測図及び昭和実測図との比較で宝暦の大改修から焼失前まで改変がされていないことを確認できる。
- ・部材寸法：御天守各層間取之図では、各階に注釈として柱寸法、長押成、六葉の寸法、窓高さ、腰壁高さ、鴨居内法高さ、鴨居厚、敷居厚が記述されており、昭和実測図との比較から焼失前までに改変がされていないことを確認できる
- ・建具：御天守各層間取之図では柱間に設えられた建具について「窓」「戸」「ハメ」と種別が記されており、古写真との比較、昭和実測図で記された敷居溝の断面寸法から、残された資料からは確認できなかった建具の仕様を確認できる。
- ・主架構：御天守各層間取之図では、解体修理を行ったからこそわかる情報として、朱丸印で記された一階、二階で通し柱がある。しかし、外周部の柱について、一階と二階で食い違いがあり、昭和実測図では通し柱か管柱かの判断ができない。既往の研究においても、一階、二階の外周部の柱について平面的に同じ位置に柱があるか否かに言及したものはあるが、通し柱か管柱かに言及したものはない。  
今回、古写真を詳細に分析し、入側柱と繫梁の取合部に見られる短冊金物と、この古絵図の朱丸印と関連があるのではないかと仮説を立て、改めて古写真、昭和実測図、古絵図で短冊金物の有無と外部跳出し部材の長さに規則性を見出し、古絵図で朱丸印を記された柱が通し柱であることがわかった。他の柱での古写真、昭和実測図による分析と合わせ、全体主架構の中での通し柱、管柱の配置を特定できる。(分析の詳細は別章)

表-4.7.1 古絵図一覧表

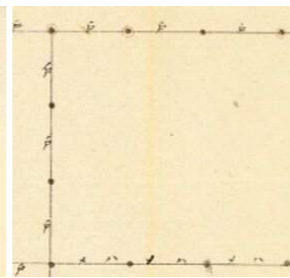
史料名	年代	所蔵	目的・概要
1 御天守各層間取之図	宝暦5年(1755)修理関連史料	原本：個人蔵 写本：名古屋市鶴舞中央図書館	・大天守各階平面図 ・通し柱・管柱の種別、柱・鴨居内法高さ、敷居厚長押成、窓高さ、釘隠六葉等の寸法、建具種別が記載されている
2 御天守平地割図		原本：個人蔵 写本：名古屋市鶴舞中央図書館	・大天守平側(東西方向)断面図 ・各重破風立面が重ねられている
3 御天守地割		写本：名古屋市鶴舞中央図書館	・大天守南妻側から見た断面図
4 御天守妻地割		原本：個人蔵 写本：名古屋市鶴舞中央図書館	・大天守南妻側から見た断面図 ・各重破風立面が重ねられている
5 御天守御修復仕様平之方ヨリ見渡之図		原本：個人蔵 写本：名古屋城総合事務所	・大天守上げお越しのための施工図
6 御天守御修復仕様妻之方ヨリ見渡之図		原本：個人蔵 写本：名古屋城総合事務所	
7 最初改御天守初重本側御柱水積指図		写本：名古屋城総合事務所	
8 中途改御天守初重惣御柱水積指図		写本：名古屋城総合事務所	
9 御天守水積墨引 有来姿		写本：名古屋城総合事務所	
10 御天守水積墨引 概水		写本：名古屋城総合事務所	
11 御天守水積墨引 出来方		写本：名古屋城総合事務所	
12 御天守起方墨引		写本：名古屋城総合事務所	
13 銅葺野地之図		写本：名古屋城総合事務所	・大天守二重～四重を本瓦葺から銅瓦葺へ葺替える施工図 ・改修前後の下地を含めた改変内容がわかる
14 御天守御石垣取解築方起指図		原本：個人蔵 写本：名古屋城総合事務所	・天守台石垣修理のための施工図
15 御天守御堀内遣方井楼之図		写本：名古屋城総合事務所	
16 遣方勾配寸尺之図		写本：名古屋城総合事務所	
17 御石垣屋形図		原本：個人蔵 写本：名古屋市鶴舞中央図書館	
18 遣方西方		写本：名古屋城総合事務所	
19 遣方北方		写本：名古屋城総合事務所	・工事全体の仮設物配置図
20 御深井丸内諸御役人詰所御作事本所諸番所取建方指図		原本：個人蔵 写本：名古屋城総合事務所	
21 御天守上見通絵図		原本：個人蔵	
22 御天守五重目見通地名方角		原本：個人蔵	
23 御天守五重目見通地名方角墨引(8枚)		原本：個人蔵 写本：名古屋城総合事務所	・工事着手に合わせて作成した名古屋城から周囲360度を遠望した見通し図
24 御天守五重目見通地名方角付録		原本：個人蔵	
25 御天守御畳員数圖	明治23年(1890)写し	写本：宮内庁公文書館	・大天守の畳の枚数についての報告書。 ・間取りを確認できる
26 御天守鱧木地仕口寸尺之圖面	文政10年(1827)原本成立 明治23年(1890)写し	原本：名古屋城総合事務所 写本：宮内庁公文書館	・文政10年(1827)に行われた金鯨の改鑄に際し実測された鯨の木下地図 ・木下地寸法、木下地分割、木芯形状・寸法、屋根への取り付け方等が書かれている ・寸法が記載された江戸期の絵図としては最後の絵図



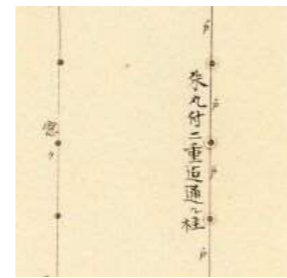
「御天守各層間取之図」



部分拡大①：部材寸法



部分拡大②：建具種別



部分拡大③：通し柱朱丸印

(8) 文献史料

① 概要

名古屋城に関する史料収集は江戸時代から始められており、以下のような史料がある。

史料名	成立年代	著者	所蔵	概要
『蓬左遷府記稿』	文化14年(1817)	加藤品房	名古屋市蓬左文庫 (写本) 名古屋市鶴舞中央図書館 (写本) 名古屋城総合事務所	・名古屋城築城に関する資料集成 ・各種史料を引用し、それぞれの最後にその出典と、引用が全文か略文なのかを朱字で記されている ・天守復元に際しては本書所収の「名古屋御天守間敷」「名古屋御城御本丸御天守御用材木」の二つが重要
『金城温古録』	文政4年(1821)～ 明治42年(1909)	奥村得義 奥村定	名古屋市蓬左文庫 公益財団法人東洋文庫 名古屋市鶴舞中央図書館 (写本) 宮内庁 (写本) 名古屋城総合事務所	・名古屋城に関する百科事典的資料 ・奥村得義が文政四年に尾張藩から「名古屋城古義」の編纂を命じられ、その後没するまで記し続けた大著 ・前半部を献上した2年後の文久二年(1862)、後半部の草稿を残して得義が没した為、養子の定が編纂を引継ぎ、明治35年(1902)に清書を完成させ徳川家に献納
『国秘録 御天守御修復』			徳川林政史研究所 公益財団法人東洋文庫 名古屋市蓬左文庫	・奥村得義が『金城温古録』を編むにあたって集めた資料の集成
『熱田之記』	不明	不明	名古屋市鶴舞中央図書館	・熱田神宮及びその周辺に関する地誌 ・筆録されている「尾州名護屋御天守御材木」は『蓬左遷府記稿』の「名古屋御城御本丸御殿御天守御用材木」とほぼ同内容の史料で『蓬左遷府記稿』と共に名古屋城天守の用材の材種に関する重要な資料
『御天守御修復取掛りより惣出来迄仕様之大法』 (宝暦大修理関連資料)	宝暦5年(1755)	不明	(原本) 個人造 名古屋市鶴舞図書館 名古屋城総合事務所 名古屋市蓬左文庫	・宝暦2年(1752)～同5年(1755)に行われた名古屋城天守大修理工事全般に関する絵図、文献史料の内の一つ ・麓和善・加藤由香により各資料の伝来経路、所蔵先、内容が詳細な分析により明らかにされた ・各資料は一般図としての平面図、立面図、断面図の他、築城時から大きく外観が大きく変わる銅瓦葺き屋根の施工図、孕んだ石垣を修理するための工程、工法の書かれた施工図、工事全体の仕様書、工事日誌等であり、宝暦大修理の内容を詳細に知ることができる ・その中でこの文献は、宝暦大修理工事全体の仕様書ともいえる資料

中でも『金城温古録』は奥村得義(かつよし)(1793～1862)とその養子・定(さだめ)(1836～1918)が編集した10編64巻の名古屋城に関する百科事典的な文献である。天守については、間取図を交えながら、各階の仕様の変遷、運用のされ方を確認でき、また外観の仕上仕様等の記述により古写真、昭和実測図から得られる情報を補完する。編纂経緯は、文政4年(1821)に奥村得義が尾張藩に「名古屋城古義」の編纂を命じられ、資料収集と調査を終えて天保13年(1842)執筆に入り、万延元年(1860)にまず前半の4編31冊の清書本が完成し藩に献上された。その2年後後半部の草稿を残して得義は亡くなり、『金城温古録』の編纂は養子の定(さだめ)に引き継がれたが、明治維新によりその編纂作業は中断された。明治30年代に入り、晩年にさしかかった定が原稿整理を再開し、明治35年(1902)に全巻が完成し尾張徳川家への献納を終えた。編纂開始から完成まで実に81年の月日が費やされた事になる。これらのうち、奥村家所蔵だった草稿本と、徳川家へ献納された清書本とが、蓬左文庫および東洋文庫に所蔵されている。

また、築城から約150年後の宝暦年間に行われた大規模修理について、前章の様々な絵図に加え、修理工事全体に関する詳細な仕様書としての文献史料が『御天守御修復取掛りより惣出来迄仕様之大法』である。これにより、改修による改変部分や仕様変更内容について具体的な素材、材種や寸法について記されており、古写真、昭和実測図を補足すると同時に、史料の確かさを確認することができる。

② 分析の概要

前項の主要文献史料から得られる情報の概要を下記にまとめる。

表-4.8.1 仕上・仕様の概要

部位	天守種別	階・重	年代	内容		
金 銃	大天守	五重	築城時	椽の寄木を黒漆塗りの上、鉛板竹釘留め		
			文政10年	檜の寄木に取り換え		
				鱗型の唐金(青銅)板に金板を漆でかぶせ貼り 享保15年・文政10年・弘化3年に改鑄 黒目：赤銅、白目：銀 銀		
屋 根	大天守	初重～四重	築城時	土瓦葺		
		五重		銅瓦葺		
		初重	宝暦大修理	土瓦葺のまま		
		二重～四重		土瓦→銅瓦葺に葺き替えの上、チャン塗 下地：野地板二重貼 下貼 椽・梅・松板取り交ぜ 上貼 檜 銅平瓦巾八寸、長さ三尺の銅板を五寸ずつ重ね葺き 銅丸瓦巾八寸、長さ一尺五寸の銅板を下端は内側へ上端は外側へ一寸ずつ折り曲げ、葺き重ねる		
		五重		銅瓦葺のまま		
妻 壁	大天守	五重	築城時	漆喰		
外 壁	大天守			壁厚：一尺 壁真：四寸厚の檜、檜板を葺掛貼 腰壁：隠狭間を穿つ 仕上：白土		
地階明り取り窓	大天守		築城時 宝暦大修理	東南の1か所のみ 東北及び南面の2か所に新たに設ける		
飾 金 具	大天守	五重		御紋片面7か所、両面計14か所 直径一尺二寸五分 金減金		
			外部六葉	大天守 小天守	五階 二階	赤銅煮黒目 赤銅
			破風板、懸魚	大天守	五重	築城時 銅板
鬼 板	大天守	五重		木下地に銅板を銅釘打ち 青海波毛彫り、金減金		
		二重～四重		唐銅(青銅)鋳物にチャン塗		
外部建具銅網戸	大天守	五階		南面・北面に1か所ずつ		
		一階～四階		南面・北面に2か所ずつ		
敷居溝				鉄板敷き 鉄板の下に銅製の入れ子を設え、そこ銅製の水抜きを設ける		
		小天守 橋台	一階	三和土 栗石		
床・路面	大天守	地階		口御門～最初の段まで：鉛セン、七寸五分角、厚さ一寸、四半敷き 口御門～最初の段まで：鉛セン 七寸五分角、厚さ一寸、四半敷き 最初の段～奥御門奥 瓦セン		
畳 縁	大天守	五階	宝暦大修理	五階身舎：綾小紋、入側：高宮縁		

(9) 復元根拠資料を用いた復元原案検討の考え方

表-4.9.1 根拠資料を用いた復元原案各部の考え方一覧表

	復元原案根拠の考え方	項目・部位	具体的な復元原案根拠資料							備考	
			遺構	遺物	古写真	昭和 実測図	摺本 拓本	古絵図	文献		類例 建物
規模・位置	・天守台遺構の発掘調査、既存状態による ・昭和実測図による ・古写真解析寸法値も参考にする	建物位置	○		○	○					
		平面規模	○		○	○					
		高さ	○		○	○					高さの基準を遺構(口御門内の排水溝)とする。
構造形式・各部寸法	・古写真、昭和実測図、古絵図、文献史料による	構造形式			○	○			○		
		屋根形状			○	○					
		間取り			○	○			○	○	
		各部寸法			○	○					
外部意匠	・古写真、昭和実測図による ・瓦、飾金具は遺物、古写真、昭和実測図による ・瓦は類例建物も参考とする	棟			○	○				○	
		妻壁			○	○				○	
		軒裏			○	○					
		外壁			○	○				○	
		金鯨		○	○	○				○	
		鬼板		○	○	○				○	
		銅瓦		○	○	○	○			○	
		土瓦		○	○	○				○	○
内部意匠	・古写真、昭和実測図、摺本・拓本、文献資料による	飾金具			○	○	○			○	
		階段			○	○					
		窓格子			○	○				○	
		井桁			○					○	
		天井廻り造作			○	○				○	
		内壁			○	○					
		長押			○						
建具	・古写真、昭和実測図、文献資料による	口御門			○	○					
		奥御門			○	○					
		明かり取り窓			○	○				○	
		土戸			○	○					
		板戸			○	○					
		舞良戸			○	○				○	
材料・仕様等	・古写真、昭和実測図、摺本・拓本、古絵図、文献資料による ・類例建物も参考とする	礎石		○							
		木材			○					○	○
		鬼板		○	○	○	○			○	
		銅瓦		○	○					○	
		飾金具		○	○	○	○			○	
		磚								○	
		土間								○	
		畳							○	○	
中込厚板 剣堀の剣		○		○				○	○		